

繁殖牝馬が子馬を育児拒否するとき

静内診療所 川越美琴

母馬が自分の子馬をうまく受け入れられないために、乳母付けや、人工哺乳への切り替えなどの対策を迫られた経験はありますか？母馬に乳母付け処置をしたり、鎮静をかけたり、ホルモン治療を実施してもらったことがある方もいるかもしれません。

今回は馬の育児拒否（Foal Rejection・ネグレクト・育児放棄・虐待）について話します。

●育児拒否にあたる行動

次の行動は、母馬が育児拒否をしている指標のひとつになります。

お産後に子馬を舐めない・子馬が遠ざかった時に子馬を鳴いて呼ばない・子馬から逃げる・子馬への授乳を嫌がる・子馬に対して耳を絞る・子馬を嘔むまたは嘔もうとする・しつこく追いかけて回す・蹴る

多くの場合、分娩後数日以内に子馬を傷つけ、ひどい時には嘔んで振り回したり、投げ飛ばしたり、踏みつけたりして殺したりしてしまうようです。

●育児拒否の原因

原因は以下のように様々であると考えられています。

初産での経験不足による恐怖・遺伝・産んだあとの早すぎる人間の介入・治療などによる子馬の匂いの変化・後産が落ちる時の痛みやストレス・乳腺炎や乳頭のケガまたは過剰な吸引による痛み・ホルモンバランスの乱れ・子馬の低酸素脳症

馬のふるまいをよく観察することで、対策の手がかりにつながるかもしれません。

●育児拒否への対策

原因によってアプローチも変わりますが、後的な育児拒否を避けるために、分娩後の子馬に羊水の匂いを残しておくこと、子馬の治療の際は処置している所を母馬に見せておくこと、また授乳を痛がる時は治療してあげることができます。

母馬の攻撃性が低ければ、子馬が乳を飲みに行くときに母馬をつないでもっておくだけで授乳に慣れる場合があります。子馬を怖がる場合は、広い場所にはなすと落ち着くことがあります。また、犬や他の馬など第三の脅威を近づけることで、子馬を守りたくなる場合もあるようです。ただし、危険を感じる場合には人と子馬の安全を最優先に行動してください。

最後に、欧米で新しく提案されている治療方法として、高容量のPG を投与する方法があることを紹介させていただきます。この方法では上手くいけば30分ほどで子馬を許容するそうです。

詳しくは日高育成牧場の村瀬先生が記された「乳母づけにおけるPGF2 α の利用」という記事をぜひ読んでみてください。

<https://blog.jra.jp/shiryoushitsu/2022/02/pgf2-8e7e.html>

子馬の移行免疫不全による病気の重篤化、母馬の攻撃によるケガ、人工哺乳の労力や乳母の費用などが、実の母馬を治療することで減らされればいいなと思います。

育児拒否の治療を検討したい方は、かかりつけの獣医さんに相談してみてください。